

Library of the Year 2016

飯田市立川路小学校 宮澤優子

1、はじめに

第18回図書館総合展にて開催された「Library of the Year (LoY) 2016最終選考会」に参加してきました。今までのLoYや今年からのLoYにおける、クラウドファンディングを含めた運営方法や各賞の審査方法、最終選考に残った4機関の授賞理由や当日のプレゼンテーションについてはすでに各所で議論、報告がされweb上にもアップされておりますのでそちらをご覧くださいこととして、そしてそれについての個人的な思いも多々あれどそれちょっと横に置いておき、今回はLoYの最終選考に「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」が残ったことに対して学校司書としての私見を述べたいと思います。まずは、優秀賞受賞理由と、最終選考会での結果を報告しましょう。以下は「IRI 知的資源イニシアチブ」のHPからの抜粋です。

(抜粋) LoY2016 優秀賞 -データベースにより学校図書館の知を拓く-

受賞館: 東京学芸大学学校図書館運営専門委員会

受賞理由: 「学校図書館活用データベース」の継続的構築、学校を開き、知の共有の場を創成している点を評価。

推薦詳細: 「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」を構築。学校図書館での授業実践事例や実践例等を、収集し公開している。外からは見えにくい学校図書館の活動を、対外的に明らかにしている取り組みを継続して行っている。」

学校図書館が最終選考まで残ったのは初、そして最終選考会でオーディエンス賞（最終選考の会場参加者とクラウドファンディング事前投票による投票での得票が一番多かった優秀賞対象館に授与されるもの）を受賞しました。

2、学校図書館の現状

学校図書館を取り巻く問題は根が深く、一朝一夕には解決しないものが多いでしょう。運営、運用、その他山積みであるさまざまな問題の中から、学校司書の現状を少し紹介します。あくまでも私の周辺事情です。これより良い状況も悪い状況もあるでしょうが、これが特殊事情とは到底思えません。

① 一人職場

学校司書はほぼ一人職場です。選書、購入、受け入れ、装備、配架、蔵書点検などの管理はもちろん、広報、読み聞かせ、授業支援、特別な支援を要する児童への支援、ボランティア等の受け入れ、児童会、ありとあらゆる業務が相談相手もない中で一人の肩にか

かっています。学校で暮らす以上、図書館業務以外の校務分掌や生徒指導案件等も避けては通れない仕事です。そして、たとえ初任であろうがいきなり一人立ちです。

②不安定な雇用形態

公共図書館司書以上に、学校司書の雇用形態は不安定かつさまざまです。正規採用はもちろん少なく、専任でなかったり、フルタイムでなかったり、複数校兼務であったり、低賃金、雇止め等の問題もあり、業務の継続性にも影響を及ぼしています。そして、配置されていればまだしも、未配置校もちろん存在します。

③研修機会の少なさ

ペーパー司書（新卒初任含む）で採用されても研修などないまま業務スタートもざらではありません。また、着任後も非正規雇用職員の研修出張費が予算化されていないところも多く、数少ない研修にも参加は難しいです。そのため、たとえば一律に定められた研修を受けてスキルアップしていくこともありませんし、校種、学校規模、経験年数等によるさまざまな問題を解決する機会もなかなか得られません。学校司書のスキルアップは個人の力に頼るところが大きいと感じています。さらに、学校司書として授業支援に寄与するためには教育課程や各教科の指導案にもアンテナを張らねばなりません。その感度や精通具合にも幅があり、その部分をフォローできるような研修は特に少ないと感じます。教育委員会において公共図書館が社会教育の管轄、学校図書館が学校教育の管轄であることも、研修体制がうまく組まれない原因の一つであると感じます。

④資源の少なさ

選書ツール、授業支援ツールなどの情報、資料費、消耗品費などの予算、何をとっても少ないのです。某T社から毎週来る新刊案内を片手に選書していた公共図書館時代の自分にカツを入れたいくらい、自分で収集しなければ情報は全くなにも入ってきません。授業支援の事例や指導方法も確立されたものはなく、それらの情報を共有できる仕組みもまだまだ未熟です。そして資料費の少なさ、公共図書館から学校図書館へ移動したときの一番の衝撃でした。この年間予算で6学年分の資料をどう選書したらよいのかと途方に暮れたものです。

⑤手探り運営

学校図書館には「読書センター」「情報センター」「学習センター」の三つの機能が求められています。私が図書館司書という存在を知ったのは高校生になってからです。田舎の小中学校には配置されていませんでしたし、公共図書館も書店もない自治体に育ったので、

図書館＝本を借りて読むところ、という認識しかありませんでした。ところが現在学校図書館に求められる機能は先述の通りです。自分が経験してこなかった学校図書館像がそこにあるわけです。しかし教育課程に即してこれらを十分に機能させるためのノウハウは共有されていません。そもそもそのノウハウやら仕組みやらが確立されているのかについても甚だ疑問です。それにもかかわらず、これらが十分機能していることが前提で現場には

アクティブラーニングという言葉がおどっています。

3、学校図書館の可能性

文部科学省の全国学力テストから見る小学生の図書館利用率は平均が70%前後と出ています。ただし、これは昼休みや放課後、学校が休みの日に限定した図書館の利用調査であり、授業等での利用は含まれていません。ですから授業での利用を加えればこれより高い数字になることは確実でしょうし、公共図書館のように利用者登録率という視点で考えれば学校図書館の利用率は100%でよいのではないのでしょうか。

そうです、目の前の子どもたちが全員利用者なのです。公共図書館の利用者は、利用意志でフィルタリングされた一部＝3割の市民です。ところが学校、とくに学校図書館との最初の出会いである小学校においては全児童が利用者になり、さらに本人の意思にかかわらず授業で定期的に訪れるのです。ここにどんなチャンスがあり、どんな価値があり、どんな意味があるのか、私が仕事をするうえでいつも考えている視点の一つがこのあたりにあります。

「子どもたちが『学校図書館利用者』のうちにできること、やるべきことがあるのではないか」

図書館総合展で参加した某フォーラムの中で「相互貸借制度というものがどれだけ一般に認知されているだろうか？」という発言がありました。「うちの学校の子どもたちはみんな知っているよ!」その時の私の思いです。なぜなら、公共図書館の使い方を勉強する中で必ず話すからです。図書館利用教育、公共図書館利用教育、情報リテラシー、これらを指導要領と絡めつつ子どもたちと一緒に勉強できるチャンスが、学校図書館にはあるということです。なにしろ利用率の高さはすばらしいのですし、子どもたちが「学校図書館利用者」のうちに「図書館利用者スキル」が獲得できるなら、今公共図書館が抱えている問題のいくつかが解決に向かうでしょう。可能性も広がるでしょう。ただし、先述の学校図書館の現状から考えると、それは理想にすぎません。

4、図書館界における学校図書館への関心

さらに、図書館界における学校図書館への関心度についてはいかがでしょう。昨今、公共図書館が積極的な学校支援を行い、成果を上げ、評価されているすばらしい事例がいくつもあります。鳥取県立図書館の学校支援センターなどその最たるものではないのでしょうか。しかし、そのような事例はごくごく、一部でしかありません。今回の図書館総合展への入場者数は3日間で31355人と発表されましたが、中日に一日会場にいた私が学校図書館関係者の入場者章をぶら下げた方を見かけたのは両手で足りる程度（片手か？）開催されたフォーラムのうち学校図書館関係の占める割合の低さ（これも片手で足りるの

か?)は言うまでもありません。これは、学校現場の司書や司書教諭、いわゆる学校図書館の「中の人」たちの努力が足りない、意欲が足りない、で片付けてよい問題なのでしょうか。このことで学校図書館をめぐる様々な制度の制定や改革が遅々として進まないということはないのでしょうか？

5、私の思い

利用率100%の学校図書館、可能性やチャンスはいっぱい、でも現状ではそれを生かしていない。それをずっと歯がゆく思ってきた私は、今回のLoY最終選考会の「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」プレゼンテーションに応援メッセージを寄せさせていただきました。

「すべての子どもたちと先生が利用者です。私たちにできること山盛りです。だからこのDBが奇跡ではいけない。」

ただし、初稿は最初の一文に公共図書館にケンカを売るようなものを入れていました。もちろん意識して。

「学校図書館、こちとら利用率100%！」

「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」のLoY最優秀賞受賞は、ないないづくしの現場でもがいてきた私にとって、さらにもがくことへの肯定のようでもありました。より多くの方に学校図書館の現状を知っていただき、その価値や可能性に思いをいたしていただくきっかけとなりうるだろうし、それと同時に自分たちも考え、動き、進化していくためのエネルギーをいただいたようにも思うのです。

なにより、現場で実際に起きているトラブルや課題のヒントがたくさん詰め込まれたデータベースのコンテンツの数々は、孤軍奮闘する学校司書たちの救世主たりうる情報であふれています。ことあるごとにこれを利用してきた私には、もっと多くの仲間にも知ってもらい、それぞれの場で活用してもらおうチャンスであるように感じられました。それによって図書館と司書教諭、司書のスキルが上がり、その有用性を学校現場により強く印象付けられたら、まだまだ未熟な学校図書館関係の制度が少しでも前進するかもしれません。今回の「東京学芸大学学校図書館運営専門委員会」のLoY受賞から、利用率100%である学校図書館まわりのさまざまな事象が少しずつ動き始めたら、今回の受賞の価値がそこにもひとつ見出せると思っています。